

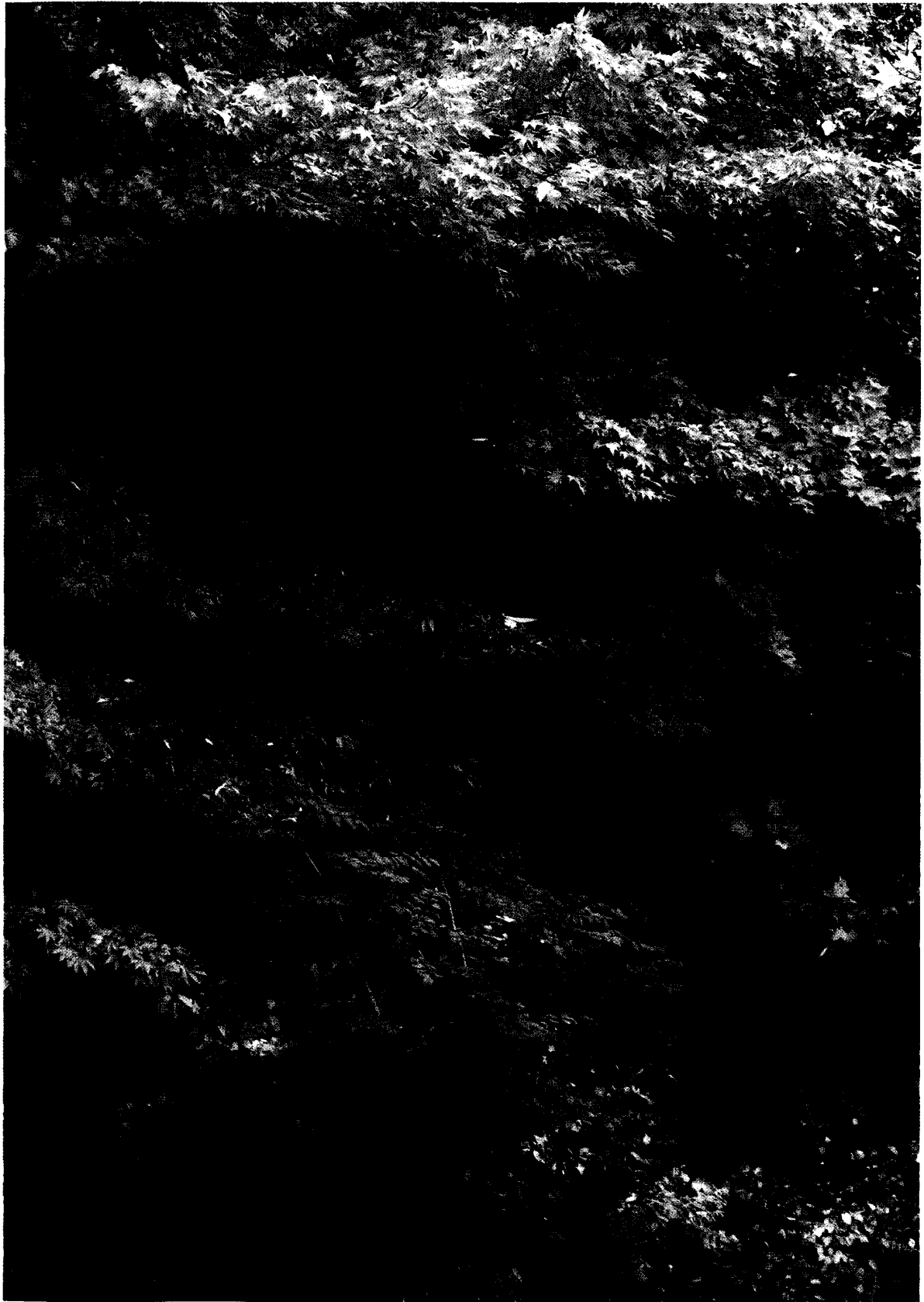
それから、秋が来た（2）（写真）

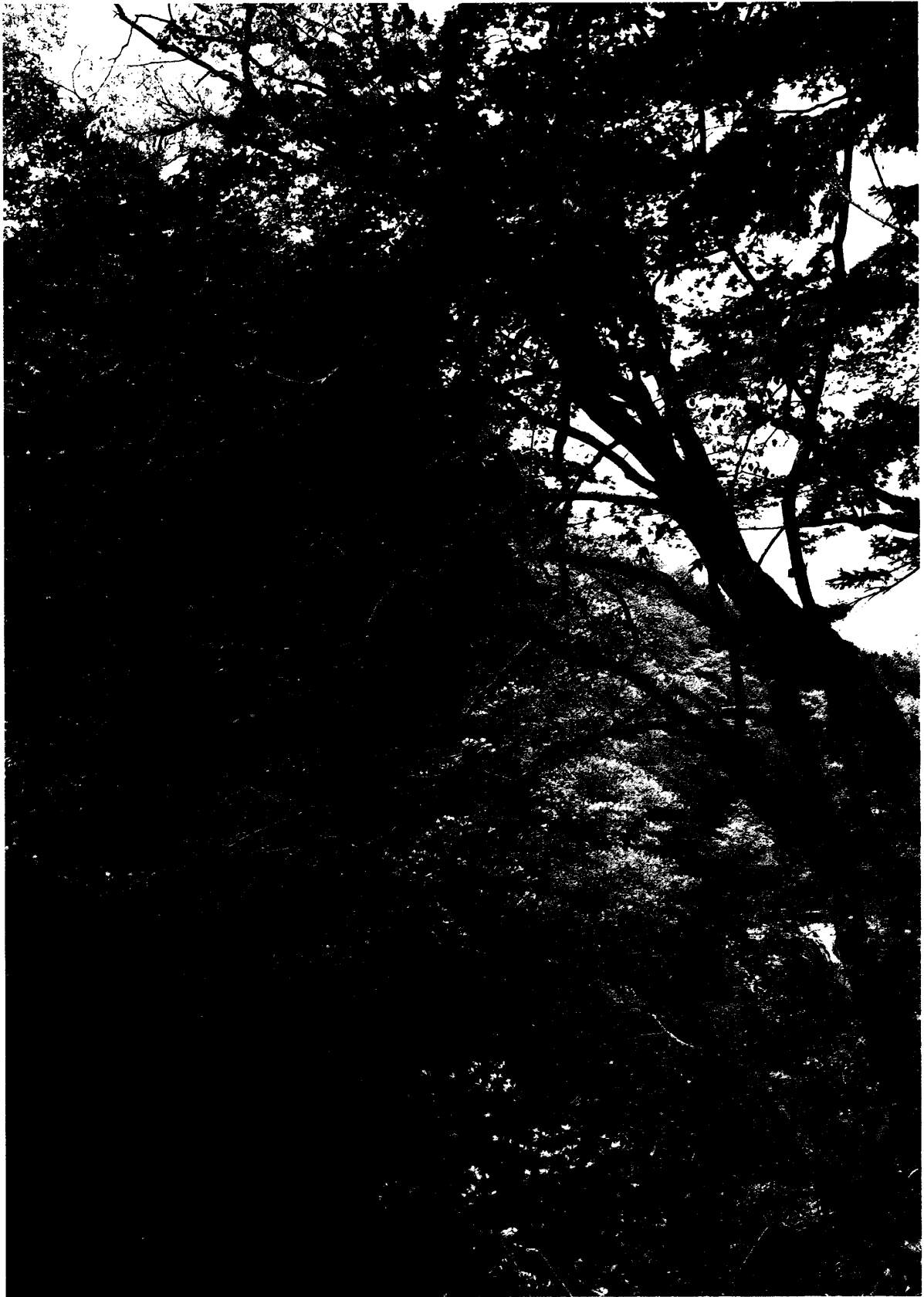
Then, Autumn Is Come（2）（Photograph）

藤 原 等

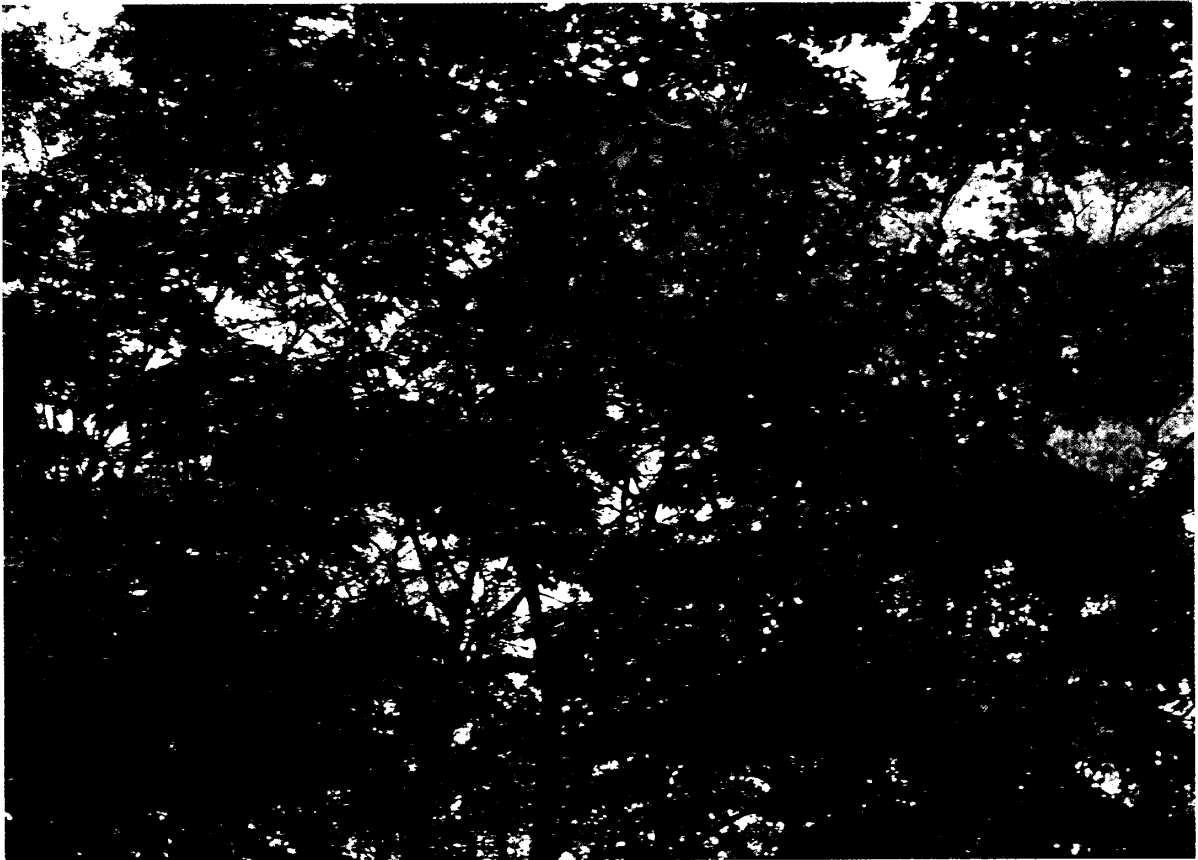
FUJIWARA, Hitoshi















長い間、写真は現場主義であると考えてきた。スナップ写真は勿論のこと風景写真や、人物写真、商品の商業写真においても決定的瞬間がとらえられているものと考えてきた。しかし、デジタル写真が発達するようになってきて、コンピュータによる画像加工操作によってその写真に撮影されていない別の画像が付加されたり、撮影された画像の中からある部分を消去したり、置き換えたり、彩度や鮮明度の変換という技術も可能になってきた。写真におけるオリジナルとはどのようなことを言うのかボクは近ごろ戸惑っている。写真家の土門拳は絶対非演出の決定的瞬間を追求したのだが、土門が生きていたらデジタル写真技術についてどのような発言をしたのであろうか。写真術が発明されてフィルム全盛時代になるまでの間は、湿式も含めていわゆる乾板の時代であった。この時代には乾板上に映し出された画像に修正を加えることがなされていた。修正技術は写真師の命運を決する技術で、街の写真館はその技術を競い合った。余り美人ではない人の顔が、絶世の美人に印画されることもあったから、お見合い写真には「気をつけろ」なんてことが巷で囁かれていた。これも画像加工操作の一つであったが、最近のデジタル技術では「修正」したことがプリント上では肉眼では弁別することができないところまで進歩したのである。修正したのか、しないのか、人間の視覚情報処理機能では判別できないところまで進化したのである。判別のために一々ナノテクノロジーを駆使するようなことはできないのである。

写真はファインダーの中に映っている画像を部分的に寄せたり、引いたり、消し去ったり何かを付加することはできない。ズームレンズで画角の変化によって強調したり、省略したり或はカメラポジションを撮影者が変えることによってファインダー内画像を変化させることは可能である。しかし、シャッターを切ってフィルム上にひとたび結像させしまったら、その画像を変化させるわけにはいかないのである。

そんなことを、ぼうっと考えながら、相変わらず一秒の休みもなく痛み続ける左脇腹から左背中（帯状疱疹後神経のやつメ！）を摩りながら、ボクは、4歳年上の倶知安高校の先輩で油彩画家の穂井田日出磨（ほいだ・ひでまろ）さんの「はずし娘」(はずしっこ)、「はずし娘三代」、「はずし娘三代・阿」の前に立っていた。何というリアリズム、圧倒される空間、「すごい」、先輩の限りない情熱に唸り声をあげてしまった。時は、2003年10月。小川原脩記念美術館。1999年制作の「はずし娘」も2000年制作の「はずし娘三代」も、2003年制作の「はずし娘三代・阿」も、限られたキャンバスのフレームの中に、なぜこのような凝縮した形で人物を収めることができるのか。まさに、写真では絶対に撮り得ないフレームワークなのである。画家のみが、穂井田さんのみがなし得る技の世界なのだ。写真は確かにリアリズムであるが、絶対非演出の決定的瞬間をとらえることが、4000分の1秒とか、8000分1秒とかの瞬間もとらえることはできるのだが、この「はずし娘」シリーズのような背景の中で、このようなキャンバスフレームの中で、これだけの「はずし娘たち」の人物とそのポーズを写真では表現することができない。穂井田日出磨さんのリアリズムを堪能することができた。穂井田さんが倶知安高校3年のときに「全道展」に初入選されたわけだが、中学生のボクはその報道に興味したことを覚えている。昨日のできごとである。因藤先生や小川原先生、酒井先生たちの麓彩会は若き穂井田日出磨さんの才能が開花する刺激になったようである。

小川原脩記念美術館の矢吹俊男館長の企画力に敬意を表したい。常設は小川原脩さんでも、後志が生んだ作家は多士済々で例えば麓彩会の作家達も存在するので、何かこの美術館でやることできないかなどと、4年前になろうか、ボクが北海道生涯学習審議会の仕事で訪問したとき矢吹俊男館長と話したことを思い出す。嬉しい限りである。穂井田日出磨さんを企画展として取り上げてくれた。題して「麓彩会の作家たち3.」。ついでに倶知安風土館で短時間矢吹館長と話ができた。今年の10月、穂井田さんのリアリズムにすっかりやられちゃった直後のことである。「酒井嘉也先生が、開館以来初めて今夏足を運んでくださった」と。いつの日か酒井嘉也先生の画業を拝見したいものである。小川原脩先生は日の当たる道を歩いてきて、今日がある。しかし、倶知安に住み続けて倶知安を描き続けてきたもう一人の男が存在しているのである。酒井嘉也先生である。若いとき父親を失い、病弱な酒井少年は母親がやっていた「カクロク」という商標の精米所を手伝いながら画業に命を燃焼させていたと思う。ボクノ父と旧制倶知安中学の同級生で、小川原先生も、穂井田さんもみんな倶知安中学（高校）出身なのだ。時間軸が少し違うだけのことで、羊蹄山を仰ぎ、ニセコ連山に夕日を見ていた倶知安の仲間達なのである。泣いている。この日、羊蹄山の夕暮れは、薄いピンク色に染まっていた。そして

そして、時に、高校時代からボクに大きな芸術的刺激を与え続けてくれた我が友、高橋勝己君も倶知安高校の美術室で油彩画を描いていたのだ。高橋君は、絵描きを夢見て上京していったのだ。そして、小澤村（現、共和町）には、オシャレな、オシャレな「西村計雄記念美術館」（にしむら・けいゆう）がある。小学生のころ祖母藤原スマノ（旧姓田中）さんに手を引かれながら「この家は、油絵の絵描きさん、西村さんが生まれた家だよ」と教わったことがある。もちろん、ボクには油絵というものがどのようなものなのかまったくわからなかった。小学生が油絵を見る機会など全くなかったし、国鉄労働者の息子のボクの家の文化程度はそんなものであった。唯一明治生まれの女性ながら藤原スマノさんは、大正時代に自転車をも所有し稲穂峠や倶知安峠で鉄道線路の草刈りの保守作業の移動用として使っていたという文化人であった。だから、油絵を知っていたのだ。アメリカ製のシンガーマシンでぼくの洋服も作ってくれた大江村仁木の林檎農家の三女で、今思うに本当の才女であったと思われる。躰の厳しい人であった。そのような倶知安町や共和町、岩内町に美術館ができていたのである。50年前の小学生には油絵を見るのが極めて困難であったが、現在の小学生には可能なのである。この間、戦争をやらなかったわが国の到達点の一つでもあろう。岩内町の木田金次郎美術館とニセコ町の有島記念館を同時に見ることもまた歴史の荒波の中で彷徨する魂の叫びを感じられるに違いない。また有島記念館付近の旧有島農場跡と、雨龍町の旧蜂須賀農場後を対比的に見ることも21世紀、北海道で新しいフロンティアスピリッツを考える上で感動的であろう。田中という姓のことで思い出したことがある。

それは、先ごろ、毎日新聞社発行の「俳句αあるふあー」(2002年8－9月号、通巻57号) という句誌を読んでいたときのことである。田中という姓に出会ったのだ。田中垂美さんの作品が載っていた。田中さんは、平成13年「海程」新人賞に輝いた新進気鋭の現代俳人である。昭和45年生まれというから、この新しい感覚には何か清々しさを感じず。作品を上記「俳句αあるふあー」誌から引用紹介する（もちろん縦書きであるが、ボクが勝手に横書きにした）。

白百合の気流崩さず一筆箋
 木下こしたやみ闇来ればびどろ絵巻かな
 うすものやうつくしきしべ薬ゆきちがふ
 わが余白たたまれやすく合あ歡むの月
 金魚玉吊りクリムトの女ないつ
 耳といふ破水やはらかゆふがほよ
 朝顔市語り明かしてくすぐつたい

田中さんは東京都生まれであるが、北海道新聞社の千歳支局で新聞記者をしていた北海道の飯を食った人である。こういう人の俳句も勉強したいと思った。「それから秋が来た（2）」の作品はボクには極めて珍しい「きれいキレイ」路線上のものであるが、本誌第5号掲載の「それから秋が来た（1）」の作品に比べて少し乱れてきたと思っている。これからは、上記俳人田中さんのような感覚の写真を作ってみたいものだと思っている。（2003年11月8日記）。